

会議報告書	
会議名	令和7年度 第3回草津市社会教育委員会議
日時	自 10時00分 令和7年11月17日(月) 至 12時00分
場所	草津市役所8階 大会議室
出席者	委員：四方委員、川中委員、井上委員、奥村委員、 茶木委員、駒村委員、永村委員、奥井委員、 岡田委員、山崎委員、則武委員 事務局：高岡部長、菊池理事、西田副部長（学校教育担当） 生涯学習課 山田課長、丸山係長、河合主任 傍聴人：0名
会議関係書類	<input checked="" type="checkbox"/> 有（別添のとおり） <input type="checkbox"/> 無

1 部長挨拶

【部長】

教育長が欠席のため、代わりに私から御挨拶を申し上げます。本日は令和7年度第3回社会教育委員会議に、お忙しい中御出席いただきありがとうございます。

さて、前回8月30日に開催させていただきました社会教育委員会議では、老上学区での地域版E S Dのモデル事業である防災フェスを視察していただきました。こども実行委員の皆さんに主体的に考えていただいた、防災クイズとバケツリレーを視察いただいたことで、こどもと大人が共に学び合った成果を感じていただけたのではないかと思います。

当日の様子を思い出していただくために写真を用意しております。こちらが防災クイズで、こども実行委員が緊張している様子ですが、しっかり進めいただけたと思います。もう一つがバケツリレーで、非常に多くの方に参加いただいた、きゃーきゃー言いながらやってもらっていました。参加したこどもがバケツを渡して、ぴょんぴょん飛びながら、本当に楽しそうな姿が非常に印象に残りました。バケツリレーの方には市長や教育長も参加させていただきましたが、地域の人が一体となって楽しみながら取り組む様子が伺えたところです。

また、視察後にはコーディネーターにお話しいただき、コーディネーターの役割の重要性を感じていただけたことと思います。そして、防災フェス終了後には、こども実行委員とコーディネーター、サポーターが「また来年ね！」と自然に声を掛け合っていたことが大変印象に残っております。

本日は、前回皆様からいただいた御意見をもとに、事務局で整理したモデル事業におけ

る成果と課題について御説明させていただき、今期の報告書のまとめに向けて御議論いただきたいと考えております。

どうか本日も、委員の皆様方には活発な御議論をいただきますよう、お願いを申し上げまして、簡単ではございますが、開会にあたりましての御挨拶とさせていただきます。

本日もどうぞよろしくお願ひいたします。

【事務局】

委員 15 名中 11 名出席で半数以上出席、公開原則、傍聴 0 名

資料確認

2 モデル事業の振り返り・成果と課題の検証

【資料 1】

【委員長】

これより議事を進めてまいります。

議事事項の（1）モデル事業の振り返り・成果と課題の検証について、事務局から説明をお願いします。

【事務局】

（資料 1 の説明）

【委員長】

ありがとうございました。ただいまの説明内容につきまして御質問御意見等ございますか。もし何かあればまた言っていただければと思います。

続きまして議事の（2）社会教育委員・総合教育委員会議での御意見について、こちらも事務局から御説明をお願いします。

3 社会教育委員・総合教育会議での御意見

【資料 2】

【事務局】

（資料 2 の説明）

【委員長】

ありがとうございました。この老上学区でのモデル事業に関わって、前回の社会教育委員会議で委員の皆様から出された御意見と、総合教育会議で委員から出された御意見を取りまとめて資料 2 として御報告いただきました。こちらに関わって御質問、御意見等ございますでしょうか。

【副委員長】

総合教育会議での御意見の一つ目の質問に対する回答で、「特別な知識や資格を持っていなくても、子どもの主体性を大事にできる方であればコーディネーターを担うことはできると考える」と書かれていますが、「考える」と回答された根拠・理由を教えてください。

【事務局】

今回コーディネーターを担っていただいた方に、こういったことを担うのはハードルが高いか聞いたところ、子どもと一緒にやることにある程度慣れている方であれば、例えばファシリテーター養成講座を受けるなどといったことは必要ないのではないかと御回答いただきました。また、生涯学習課やまちづくり協議会の方で伴走支援をしていきたいと考えているので、コーディネーターとして完成された人でなくても育成しながら一緒に進めていけると考えております。特別なスキルや資格を持っていなくても、子どもの主体性を大事に進めていく気持ちをお持ちで、主体的に取り組みたいと思っている方であれば、担っていけると考えております。

【委員長】

子どもの主体性とともに、コーディネーターも育てていきたいということですね。自分は特別な資格がないからできないのではないかということではなく、コーディネーターのなり手のハードルを下げたいというお考えです。

【A委員】

今回のキーワードである人材の発掘や、生涯学習課の伴走支援など、いろいろ大変だなと思いますが、モデル事業だからできることだったのではないかと思います。生涯学習課が全部関わっていたら大変なことになると思うので、今後広げていくにはこういった事業を各学区に見に来てもらって、こんなことやっているんだな、ということに気づいてもらい、その方たちを生涯学習課や今回モデル地区になったまちづくり協議会がサポートして動いてくださると、人材が発掘できるのではないかなと思いました。

【事務局】

今回地域でこういった事業を進めていく中で、参画のハードルが高く二の足を踏む方がいるのではないかというところが懸念でした。はじめは伴走支援をしながら進め、徐々に学区が中心で担っていただけるといいなと考えています。

【B委員】

すごく素晴らしいことをなさるなと思いますが、最初に公募によって集まった子どもや

コーディネーター、サポーターなどの協力者をどう見つけてくるかということが一番大変で、それをまずどのように広げていくかだと思います。募集のチラシを全戸配布したと書いてありますが、その全戸配布したチラシを誰がどのように集約するかという点がすごく難しいのではないかと思います。何をするのかを子どもにどう伝えるのか、それをどのように子どもが理解して来てくれたかというところはすごく難しいことだなと思います。

小学校は、今回はあまり関係していないのでしょうか。

【事務局】

募集チラシが子ども一人一人の手に渡るように小学校に紙での配布の協力は要請しましたが、配布のお願いだけであって、学校から直接児童に声をかけてもらったなどの御協力は、今回はいただいているないです。

【B委員】

私も活動している中で、小学校にどのくらいのことをお願いしていいのか、また、小学校にもここだけは一緒にやってほしいというところが私個人としてあります。

今回そういったことがされたがどうかは不明ですが、防災フェスについて、なぜ防災フェスをみんなでやるのか、「今度こんな事業があるんだよ」ということを学校で少しだけでも言ってもらってからチラシをお渡ししてもらうなどは必要ではないかなと思いますし、そのあたりをお聞きしたいなと思います。

【委員長】

コーディネーターと子どもたちをどう集めるのかというところで、今回のモデルはかなりうまくいったと言っていいのではないかと思います。今後他の学区で広げていくとすれば、どこがうまくいった鍵だったのかというご指摘だったと思います。

【事務局】

小学校と中学校において、電子媒体であるS i g f yで事業内容とチラシのデータの配信をお願いしました。老上まちづくりセンターにおいては、広報誌にチラシの挟み込みを行っていただきました。コーディネーターとサポーターの募集に関しては、光泉高校とC委員にも御協力いただき立命館大学で、高校と大学にはお声がけさせていただき、防災や教育に興味のある方に向け子どもたちへのサポートをしていただけないか、周知をいたしました。また、自分の子どもがサポーターとして参加するので、と、サポーターの保護者の参加もありました。

【C委員】

総合教育会議での御意見の中で、「コーディネーターとサポーターは、これまでにアク

ティブラーニングの指導を受けたことがあるか」という御質問があり、それに対して、コーディネーターとサポーターが「アクティブラーニングはわからない」「アクティブラーニングは未経験」と答えておられますが、どういう意図があって質問されたのか、流れはどういったものだったのか、気になったので教えてください。

【事務局】

コーディネーターとサポーターがそれぞれ大学生と大学院生で、アクティブラーニングを実施していた学年に近しいのではないかということで、委員の方からコーディネーターやサポーターをする方であれば、アクティブラーニングを経験していたからアクティブラーニングの成果として現在の活動につながっているのではないかという意図の御質問でした。

【C委員】

コーディネーターとサポーターがこの事業に主体的に関わっていたから、アクティブラーニングを経験されていたのかという質問の意図ですね。ありがとうございます。

【D委員】

今回、縁があってコーディネーターの団体は私の団体でも別件で取材をさせていただきました。先ほどのお話にあったように、コーディネーターのハードルを下げた方がいいとは思いますが、今回のコーディネーターはかなり素地をお持ちだったというか、レベルの高いコーディネーターだったのではないかというのが実感としてあります。実際にこどもたちとの会話を見ても、ものすごく引き出し方や出た意見に乗っかって実現に向けた会話の仕方がすごく上手だったなというのが感想としてあります。たまたま老上学区の出身の子でもあったので上手に学区で見つけられたなというのが率直な感想です。

私は仕事柄、受け皿となるまちづくり協議会の方がどうしても気になるんですが、こういう事例ができたもののこれを継続的にしていく受け皿がまだできていないことが残念に思っています、今回はモデル事業ではありますが、先のことをイメージしながら動いていけたらよかったのに、と思っています。

学生のうちの一人は老上学区の人ですが、おそらく卒業と同時にいろんなところに行かれたり、あのときに関わられた学区の大人の方たちやまちづくり協議会の職員の方々が次のコーディネーターとしての意識につながっていくと素敵だろうなと思って見させていただきました。

【事務局】

今後についてのお話をまちづくり協議会とさせていただいたときに、今現在は受け皿については考えられていないとおっしゃっておられましたが、地域協働合校事業で冬に餅つ

きを実施する際などに、今までの事業展開だけではなく子どものアイディアを出しながら何かをやっていくことも検討されていました。その際は保護者を通して子どもたちに連絡を取ることを考えておられ、まちづくり協議会の方も継続しながら活動に関わる人数を増やしていく、または少しでも子どもたちの発想を活かしていきたいと考えておられます。

【委員長】

他はよろしいですか。では議事の（2）まで終了したこととさせていただきます。

そうしましたら議事の（3）報告書のまとめに向けてということでこちらも事務局から説明をお願いいたします。

4 報告書のまとめに向けて

【資料3-1、資料3-2】

【事務局】

（資料3-1、資料3-2の説明）

【委員長】

ありがとうございました。資料3-1が報告書の全体像で、「1 地域協働校推進事業について」「2 地域における地域協働校推進事業の新たな展開」「3 『地域版E SD』モデル事業」はこれまでの社会教育会議のまとめで、特に昨年度行った矢倉学区と、今年度の老上学区の視察、KJ法を行ったあたりの内容をまとめていただいております。

今回は「4 今後の『地域版E SD』の推進に向けて」というところで、特に今回御意見をいただきたいということで取り出して資料3-2という形でまとめていただいております。ですので、資料3-2を中心に御意見をいただきたいところですが、報告書の全体像である資料3-1でもし御意見があれば、そちらでも出していただきたいと思いますが、特に「4 今後の『地域版E SD』の推進に向けて」に関わって、残りの時間で議論ができるかなどというふうに考えております。

何か御意見や御質問等があれば出していただければと思います。

【E委員】

準備もたくさんして、たくさんの人人が関わって、お金をたくさんかけたというところで、子ども実行委員が小学生6人と中学生2人というのは少し寂しいかなという気持ちもしました。前回の会議には行けませんでしたが、矢倉学区の方に参加させていただいたときも、私たち社会教育委員がいるから余計に多く見えるのですが、中でもやっぱり子どもの数は少ないかなと思いました。特に低学年の子が多かったように感じました。今回の資料でも、「実行委員の学年が思っていたより低く驚いたが、しっかりと自分の役割を果たせていて感心した」という御意見がありましたが、集まった子ども実行委員が3、4年生くらいだったのかなと思うと、どうしても5、6年生の忙しさというか。私の子どももで

ですが、土日は本当に忙しい中で、自発的に参加する子や参加させてくださる保護者の方は、やはり意識の高さなどから考えてもそれなりに成果を出してくださるのではないかなと思いますが、そうではない子たちもやはり巻き込んでいきたいと考えたときに、何のしがらみもなく参加してほしいです。

学童保育に行っているこどもたちや学童に関わる学生はたくさんいらっしゃるかと思いますが、そういった方たちはやはりこどもたちの視点というのも非常にいいものをお持ちだと思うし、何か一緒にできたらいいのになと思います。いろんなことがあってそれは難しいことかもしれません、私は非常に学童保育に感謝していて、学童でもしこういった活動を一緒にしてくださったら、成果としてもこどもたちが得るものとしても大きいのではないかなと感じました。特に小学校がこれから午前5時間授業になって学童保育の時間が長くなるときに、学童での学びも非常に多いんですけども、こういった機会が合わせていただけたりすると、こどももいるし、学生もいるし、地域の方も入ってくださったりするといいのかなと思っておりました。

【委員長】

特に去年行った矢倉は、我々大人が圧倒的に多く、見てる人で埋め尽くすような印象があったので、その印象は私も全く同感です。特に低学年のこどもたちが多かったので、学年が上の子も含めて、もう少しこどもたちが参加できることを追求したらいいのではないかという御意見で、なおかつそのときには学童や、あとこれはコーディネーターやセンターが関わってくると思いますが、学童に関わっている大学生もいるので学童を少し活用ということではないけど参加をお願いする対象に学童を含めてもいいんではないかという御意見をいただいたかと思います。

【事務局】

今回の参加者、特に小学生については3年生、4年生のみで、5年生、6年生はおられません。肌感覚ですが、やはり小学生、中学生の忙しさはあるんだろうなと思います。なので、学童等とはこの事業を含め地域と一緒にやっていく中で、どういった形で連携していくか少しずつですが考えていくかと思っています。

【F委員】

本校の学区でも地域協働合校事業を根付かせていただいていて、お声がけいただく中で、細々とですけれども中学生が参加をしたり、小学生のときに参加していたけれども中学生として参加をすると、さらにこどもも何か学び、広がりがあって、見えていても大変ありがたい事業だなということを常に思っています。

今回、地域版E S Dという言葉が出てきますが、総合教育会議の方では「『地域版E S D』の土台は～地域協働合校の取組であり」と御回答いただいているところを思うと、や

はり地域協働合校事業というすっかり根付いているこの事業と、地域版E S Dという言葉による違いを考えるべきなのか、それとも同じものとして捉えていくべきものなのか。正直、学校の方では指導している中で区別ができるところもありますが、地域において、この言葉の二つの言葉の違いをどう捉え、どう実行していくのかというあたりがもう少し明確になる方がいいのではないかなということを思います。

【事務局】

説明不足で申し訳ありません。地域における地域協働合校におきましては、今までの体験交流事業も含め、地域版E S Dで今までの地域協働合校事業をベースに、子どもの意見表明や子どもの参画を付け加えていきたいと考えております。既存の事業をベースに子どもの意見表明を付け加えたその部分を、地域版E S Dと考えております、もちろん今までの地域協働合校事業である餅つきなど、地域で行われる体験型の学習を残してもいいと考えております。

【委員長】

ということは基本的には別物ではないと考えていいんですね。地域協働合校にとりわけ子どもの意見表明をオンするときに、地域版E S Dという言い方をするという理解でよろしいですね。

【事務局】

全て子どもの意見表明の事業にすると、地域も非常に大変だと思うので、例えば4事業のうち1事業を地域版E S Dとしていただいて、他の3事業は今まで通りの地域協働合校事業として実施していただくという考え方です。

【G委員】

玉川学区では、ずっと子どもたち向けの体験や交流を地域協働合校事業で続けています。もちろん中学生もたくさん来てほしいんですが、事業をするときに、試験やスポーツ大会などで交流するのはなかなか難しいです。しかし、できるところは生徒会などにお声をかけて、少しでも入っていただいて子どもたちからもっと意見も欲しいのですが、なかなか既存の活動の中から発展するのはすごく難しいです。いきなりコーディネーターが来て、「子どもたちが中心で何かしよう」ということをモデル事業でされて、今後各学区でやっていかれるのかもしれません、例えば、まちづくり協議会やまちづくりセンターなど、どこかが核となってそこから発展していくのは今までとは変わらないと思うんです。例えば大人が企画した中でも、子どもたちが一緒になってグループワークができるような体験型で意見を言うといったことから一歩ずつ進んでいかないと、いきなりコーディネーターと子どもの意見を聞くというのは、今までの経験から少し難しいかと思いま

す。

F委員がおっしゃられたように、小学生のときに体験したことが中学生になったときに、今度は自分たちが地域でお手伝いできたらいいなという空気を作っていくのは地域の役目だと私は思っています。だからやはりこどもたちが核になって欲しいけど、どうしても大人がある程度は核を作つてからの発展かなと思います。

それと、コーディネーターの発掘は本当に難しいですが、この時代で、例えばこどもが好きだからやりたいと言われても、どんな人か分かっていれば安心感もありますが、今までまちづくり協議会とかかわりのない、どこかの方を推薦いただくのは、どういう方かわからないので私としてはちょっと怖いです。よく知っている人ばかりでなく、個人的に活動されている方もたくさんおられます。人を疑うわけではありませんが、このご時世ですので、やはり私としてはどこかの団体などに所属されている方は安心しますが、人材発掘について皆さんがどのように考えておられるか、気にかかるところでございます。

【事務局】

学校ではSDGsを進めるための教育としてESDを進めていますが、学校でも二十数年、地域協働合校を地域の方にお世話になりながら体験活動を取り入れて学習を進めてまいりました。ESDを推進する中で大事にしていることのひとつは意見表明で、自分の考えを持って発信していくということです。そしてその先にあるのは地域貢献で、自分は地域の一員として生活をしているという意識を強く持って、地域のために私たちの思いを伝えたい、地域に自分の学習を役立てたいという思いを持つ学習につながることを目指しております。それが、地域の地域協働合校のいくつかの活動の中の一つでも、そういう意識を持つこどもたちを生むような活動になればということで取り組んでいます。

コーディネーターについても、コーディネーターとサポーターの学生の割合が非常に高かったことから役割分担について悩んだこともあつただろうし、防災というテーマの中で、地域の方もいていただけすると継続的に関わられるのではないか、そうなればいいなと思っています。

【委員長】

先ほども申し上げましたが、私の理解ではESDと地域協働合校は全く別物ではないと思うんです。急に地域協働合校を全部ESDに変えて、これからはコーディネーターを付けてやりますという話はおそらくないと思うんです。G委員がおっしゃった通り、地域抜きに全く新しいことを始めることは土台無理だというのは多分そうだろうと思っています。なので、全く別のことを探ししようとしているわけではないのかなという理解です。今までの事業にプラスして少し新しいことができれば、既存の地域協働合校を少し活性化できるのではないかという趣旨と理解をしております。

【事務局】

委員長の補足のとおりです。今までやっていただいていることに少しエッセンスを加え、やっていただけたらと思っています。

【G委員】

今までの地域協働合校でいろいろな形を作ってきて、その中で少しづつでもこどもたちが意見を言うなどというように持つていけたらいいなと思っています。今までいろんな行事をたくさんしている中で、大人が土台を作つてこどもたちを迎えるという感じでしたが、それでは駄目なんだなというのはすごく思っています。けれども、例えば子どもの意見を聞くようなコーディネートも考えていかないといけないのかなと思います。だから私もいろんな世代の方々や、こどもたちにとって年代の近い立命館大学の学生の方と話す中ですごく刺激になるので、地域としてそういうものをうまく利用して、こどもたちと一緒にやっていきたいなとは思っています。

【委員長】

大人が土台を準備する活動も私はいいと思います。全部の事業で意見を表明することとか、子どもの主体性を尊重したといったことを強いられると、それがしんどい子も絶対いるので、至れり尽くせりの活動を残しても全然いいと私は考えています。

【C委員】

報告書の「4. 今後の『域版E S D』の推進に向けてのポイント」を挙げていただいていますが、私が思うにはどのようなことを主体的に誰が進めるのかというところと、伴走支援という二つが本当のポイントなのではないかと思っています。

今回の老上学区での取組をモデルケースにして他の学区のまちづくり協議会の方々にぜひやってほしいということで、モデルケースとして提示されるのではないかと思いますが、そのときにまちづくり協議会の方が中心となって主体的に進めていくものなのか、生涯学習課としてどう思っておられるかお伺いしたいです。

また、伴走支援が何よりも多分重要で、それによってコーディネーターをどう育てていくか、どう声をかけるか、一緒に何かやりたいと思う人に声かけるというところも含めて、全部の学区で地域版E S Dをやろうと思ったときに生涯学習課の方々が全ての学区で伴走支援するわけにはいかないと思うので、伴走支援を育てないと駄目なんじゃないかなと思っています。

今の段階ではまだ確立しないところもあるかもしれません、誰が中心になるかと伴走支援をどうするかという二点について、思っておられることがあれば教えてください。

【事務局】

誰が主体的に進めるのかという点は、基本的には地域における地域協働合校で主体性を持っておられるまちづくり協議会であると考えております。今回も老上まちづくり協議会にやっていただきました。

そこに対する伴走支援について、今後数年をかけて広げていくにあたって、社会教育主事を含めた生涯学習課が伴走支援をしながら学区も広げていく検討をしております。

まちづくり協議会でもいろんな課題を抱えておられて、人材発掘や参加者の固定化などが地域の課題としてあります。それを解決する手法の一つが地域版E SDではないかと思っています。ただ、全く新しいものを始めるとなると、さらに負担をかけることになるので、今やっている事業や特徴的な事業にこの手法を取り入れていただくように考えております。

伴走支援は一気に14学区をすることはとても無理だと思っています。資料2の一番下の総評にあるとおり、地域協働合校を進めるために地域コーディネーターという方が各学校にいらっしゃって、スクールE SDはやっていく中で徐々に定着していって、子どもたちもどんどん変わっていっていると思います。今後状況によっては地域コーディネーターにこちらに関わっていただくというのも一つの方法かなと思いますし、最初のハードルは下げているんですが、地域に広がっていったときに、子どもたちの意見をどう地域に広げていったらいいかという研修が必要ではないかという声ももしかしたら出てくるかもしれません、今後の展開を見ながら検討していきたいと思います。

【C委員】

モデル事業を私はすごくいいと思っているので、絶対に各地域で実現したいなと思ったからこそこの質問でした。私自身、立命館大学の、学生団体と地域をつなぐ学生オフィスで地域交流の窓口をしていますが、何か私にできることができなというところも思っています。学生団体を育てたり、新しい学生団体を立ち上げたりする中で伴走支援がすごく大事だなと思ったので、そういう質問をさせていただきました。また今後進めていかれる中で、何か私もやりたいなど、今自分の考えだけですけれども思った次第です。

【H委員】

笠縫東学区は、今現在は地域協働合校に参加する子の数が本当に少ないです。笠縫学区では2月に防災の事業をしますが、老上学区でバケツリレーに参加させていただいて、素晴らしいことをされているなと思いました。

やはり子どもの参加が少なく、もっと参加した子どもの保護者の方や地域の方たちが協力し合うことを、学区にお伝えさせていただこうかなと思っております。皆さんの御意見をいただいて本当にありがたいなと思っております。

【事務局】

先日笠縫東学区のふれあいまつりに参加して、地域とお子さんが非常に協力されている様子を見せていただきました。当日小学校では授業参観をされていて、たくさんの方が参加されていましたが、中学生もふれあいまつりで活動されており、引き続き小学校と中学校、地域が連携しながら活動を進めていただければと思います。

【B委員】

私は地域コーディネーターをしています。私の学区のまちづくり協議会のまちづくり計画は、地域協働合校の分野が第1分科会と第2分科会に分かれています。第1分科会はまちづくりセンターを主体としてやる、第2分科会は小学校を主体としてやるという風になっています。なので、私の学区のまちづくり協議会は地域協働合校については前からすごく考えながら一生懸命やっていて、やっている内容と重複するような形のものがたくさんここには書かれています。地域と学校をどのように結びつけるか、それも第1分科会では全てのこどもにどのようにこの地域の素晴らしさを知ってもらおうかというようなことができて、第2分科会は反対に、地域の人は学校へ赴いて、学校のことをよく知る、こどもたちのことをよく知るようになっています。でもそれを分けていてもいけないし、一緒にできることは第1分科会も第2分科会も一緒に考えながらやっていこうという話をしているところです。

コーディネーターを伴走支援により育成と書いてありますが、南笠東小学校では地域コーディネーターが「みな小応援隊」というものを作り、いろいろな地域の人に学校に来てもらってこどもたちを知る。そしてその中には、スクールガードなどいろいろな人がいろんな時間にいろんな場所でこどもたちを見てもらう。その中でこどもが「スクールガードでいつも立ってくれてるおっちゃんや！」というような形でいろんなところでつながってほしいなと思いますし、それで私は伴走してもらっています。私はただそれをつないでいくだけですが、みんなに参加していただくということが大事だなと思っています。

事業の継続性と書いてありますが、保護者世代を巻き込む工夫というのは本当に必要だと思います。こどもたちから見たら地域の人は学習支援に来ていただく方も含めおじいちゃんおばあちゃんがとっても多いのですが、それを一年に1人でも増やすことが大事だと思っています。応援隊だから必ずこの日に手伝いにきてくださいという言い方はせず、好きなときに皆さんに来ていただく形です。

それとこどもが、この地域の大切さ、素晴らしさをどのようにして認識していくか、どのようにしてどういう風に残していくかというのが大切だと思うんです。それは地域協働合校の大切なことかなと思いますので、こどもが地域のことを一緒に頑張っていく老上のこのやり方は素晴らしいなと思います。大人が作ってこどもを迎えるというよりは、こども自身がやって、その結果どうだったのかということを知りたいなと思って、今年のふれあいまつりではこども中心にスマイルガチャというガチャガチャを中心やってみてはど

うかと提案しました。まちづくり協議会からどういった趣旨でやりたいのか聞かれましたが、こどもがこんなものがあるからふれあいまつりに行ってみようではなく、反対に、こどもがこんなことをやっているから大人に来てもらおうということをやりたいと伝えたところお許しが出たのでやりました。地域とこどもの結びつきというか、お互いを知ることも大事で、それは特定の人だけでなくいろんな人が住んでいるということを、みんなに知ってもらうきっかけを作りたいと思っていますし、学校運営協議会でもスクールE S Dが始まって何とかしなければならないとこの間の協議会で話題に上がったので、もっともっと地域協働合校を盛り上げていきたいなと思っています。

【事務局】

南笠東学区のふれあいまつりでガチャガチャを見させていただきまして、こどもたちがたくさん参加されていました。たくさん準備してくださっていて、そういったところから大人の巻き込みがあるのかなと思いました。

【B 委員】

初めからこどもに全部任せていきましたので、大人はあまり関わっていません。

【事務局】

こどもと地域の結びつきという、伴走支援でも地域によっていろいろ現状があると思います。どこまで進んでいるか、どういった困り感があるかは学区によって異なると思いますので、その辺を踏まえながら伴走支援の在り方を考えていけたらと思います。

【F 委員】

いち学校教員として、質問させていただきます。学校には地域協働合校推進事業を実施するにあたり、ある一定のお金をいただいている、その中からこどもたちに学ばせたい内容の、より専門性がある方をお呼びして、豊かな教育活動させていただいている。今後、14学区にも広がっていくことを考えますと、学校に配分されている予算を地域へとか、学校の今いただいているお金が今後は減っていって、地域に還元するようなことがあるのでしょうか。

【事務局】

予算に関しましては、学校には地域協働合校の予算、地域では一括交付金で、分けて考えておりますので、地域版E S Dを推進することで下がることはございません。

【F 委員】

ありがとうございます。中学校においてはそういったお金を使わせていただいていて、

講師をお呼びするときには、地域にも紹介させていただき、興味のある方に来ていただくななど、本当に有効に使わせていただいております。引き続きよろしくお願ひいたします。

【D委員】

先ほどB委員がおっしゃっておられたように、南笠東学区と一緒にまちづくり計画を作りお手伝いをしている中で、学校側のE S Dと地域のE S Dで、実は意外と似て非なるところがあります。まちづくり協議会の方がおっしゃっておられたのは、学校の方は授業の一環としての取り組みなので、学年や目指すところが決まっていて、コーディネーターさんがいてくださると実現がしやすいところがあるけれども、地域でやろうと思ったら、全学年に来ていただきたいテーマでやっていくと、何となくぼやっとしまって、結果的になかなか来ていただけないことになり、ジレンマがある。それで、学校側のコーディネーターと地域がもっと連携してという点が、B委員がおっしゃられたところですが、一番難しいなと思うのは先ほど事務局がおっしゃったように、地域版E S Dをやることが地域の担い手作りや持続可能な地域作りの一つの手法になりますということをいかに伝えることができるか。地域の担い手作りはどの地域も最大のテーマになっているので、保護者世代を巻き込む工夫が必要ですが、おそらく地域から見ると、それはわかっていて、その工夫をどうすればいいのかわからないというところがあるので、いかに地域に話を持って行ったときに負担感にならない書き方の工夫というのが必要かなと思います。

老上の事例も素晴らしいなと思っていますが、他学区のいい事例も紹介しながら地域の方に言っていかないと拒否反応を起こされるといやだなと思っています。多分いろんな課題がいっぱいです、すごい負担感をお持ちの中できれいに書かれてあるので、こどもの意見表明や地域への愛着を育むことが、地域の担い手作りにつながっていくというストーリーがちょっとあった方がいいかなと思っています。

【委員長】

おっしゃる通りです。やはり先ほども話になったところで、プラスアルファだと捉えられると大変だということですよね。だから従来の地域協働合校の継続にとっても、地域版E S Dを展開することがプラスになるような、納得してもらうロジックを立てて、報告書を書いた方がいいという御意見かと思います。

【事務局】

この事業に関してはプラスアルファというよりも、現状の事業に対して、この形でやったらさらに地域の地域課題などがよくなるという、負担感がないように書きたいと思っております。

B委員から、大人が用意してこどもを迎えるのではなくて、こどもが用意して大人が迎えるという風になるというのは、ものすごく共感できます。

学校の地域協働合校は、いわゆる総合的な学習の時間にやっているんですが、調べてまとめて発表するということで終わりがちであったり、ゲストティーチャーが来られてそれを受け止めて理解するというくらいで終わってしまいます。主体的に学んでほしいけど、どうしても受身の要素があります。まだ小学校は地域にぐっと根差して一緒にやろうという主体的になる要素がありますが、中学校はこどもたちの思考も抽象的になってまいりますし、正直先生方も教科セクションが強くなります。そうすると中学校の総合的な学習はますます主体的じゃない要素が強くなります。だから、そうならないためにも地域の一員として、自分はどうしたいか、自分たちはどう関わっていきたいのかということを考えることで、学びを主体化させていくし、地域の人としての意識を高めたいという狙いがあります。ですので、地域版E S Dも同じ発想で、こどもがお客様ではなく、できるだけ主催する立場の方に持っていくことで変わるものではないか。それは小学校や中学校でつくる場合もありますが、そうしていたら先生方も大変なので今まで地域協働合校でやってきた財産を生かしながら、どうしたらこどもが主体的になれるか、少しバージョンアップしていきましょうという発想ですので、地域でもそのようなことができるのではないかと考えます。

【副委員長】

説明ありがとうございました。皆さんの御意見にそうだなと思ったり、地域の実情と照らすと理想どおりにはいかないなと思いながら聞いていたりしました。

「(1) コーディネーターの発掘」で、先ほど特別なスキルや資格が不要としてハードルを下げたいけど、誰でもいいわけではないという話がありました。今回の老上学区のケースに関して言えば、二つうまくいった背景があったと恐らく思われます。

一つは、コーディネーターもサポートーも学生や大学院生ということで、若者であったということ。やはり若いこどもにとっては非常に距離感が縮まりやすいところがあります。スキルがそこまでなくてもある程度こどもの方から心を開いてくるところがあります。ですので、そうした要素は背景にあることを踏まえておく必要があると思われます。草津市には高校や立命館大学はじめ、若者が集っている様々な方の支援があるので、そうした強みを生かしていくことが必要でしょう。

二つ目は、今回かかわった学生団体E nは、防災と地域のつながりをテーマとしている団体ですので、資格はないかもしれません、一定水準を超すスキルと知識を持って臨ませたということです。テーマや活動内容に合う知識やスキルを一定持っていないと地域の方々も不安を感じことがあるのではないかでしょうか。その辺りが不明な人がやってきて行政が伴走支援しますと言っても、地域は受け入れられないこともあるでしょう。ハードルを下げていくことやいろんな人に関わってほしいという思いを、この場の誰もが持っていることは押さえた上で、書きぶりを注意しないと懸念が先立ってしまったり、その結果形骸化してしまう可能性があるのではないかと思います。

伴走支援についてですが、結局何を支援するのかといった際、事業の中での学びや、経験を通じての気づきを促していくことが伴走支援の重要なポイントでしょう。独り立ちするにはその過程が必要です。この場合、生涯学習課の方々や社会教育主事の方、あるいは地域の方が関わっていくことが大事ですが、ある程度年数を重ねてくれればコーディネーター経験のある方や現在コーディネーターをしている方がピアで学び合ったり、サポートし合う場作りや研修を設けたりしてもいいでしょう。例えば、定期的にそれぞれの現場でどのように活動しているかを共有する場を設けるだけでも十分にその支援は機能する可能性があると思います。

「(2) 子どもの意見が出やすいコーディネート」の一つ目で、「子どもが主体となって活動できる場をつくる」とあります。こちらへの意見は二つあって、一つは今回老上学区のケースは防災というテーマ設定がよかったですということを認識した方が良いかと思いました。防災分野は例えば防災訓練はどうしたら参加者が増えるのか／楽しめるのかといった課題について、地域側もまだ多様な方法がわかっておらず、新しいアイディアが欲しい領域だからです。地域も新しいアイディアが欲しい領域であれば、子どもや若者のアイディアを受け止める形になってきます。ですので、ともに学んでいく素地が非常にあるテーマだったと思われます。大人が教えたり、機会を提供したりする活動よりも、大人もどうしていいかわからないというテーマを設定することが大事でしょう。ですから、今取り組まれている活動の中で、なかなかうまくいかないものをテーマに設定することが、子どもも大人も意見を出しやすいところではないだろうかということが一つ目です。

二つ目は、「子ども」はどういった人を指しているのかということに注意が必要だと思います。言うのは簡単だという御指摘を受けるかもしれません、例えば、不登校状況にある子どもたち、障害があるとされる子どもたち、母語や母文化が異なる子どもたち、経済状況が厳しい子どもたちが参加しやすいのかを見ていかなければならないでしょう。子どもの成長という観点でいえば、格差を助長しうることも考えられることです。今回の会議で委員の方々も学校への期待を多く述べられて、学校の先生方も努力されているのですが、地域の中のフリースクールや特別支援学級・支援学校、日本語教室などのいろいろな学びの場が子どもや若者の周りにはありますので、そうしたところにも目を向けていかないといけないでしょう。主体となって活動できる子どもが参加しているだけといった現象が起こってしまうこともあります。子ども家庭庁でもこのあたりは特に注意深く進めなければならないと議論されている事項ですので、お話をさせていただきました。

最後に、地域の担い手づくりが大切だと触れられていましたが、おそらく今回の話は担い手をつくるということよりも、地域の担い方を新しく広げたということかと思いました。地域の担い手づくりは地域の組織に入れ込んでいくイメージで、それができたらいいのですが、非常に高いハードルがあります。ですが、事業や活動ごとに少し関わってもらうパートナーシップを組んで地域の担い方を広げていくことはハードルが下がるでしょう。その中でより深入りしていく人が出てくることもあると思います。しかし、地域協働

合校に取り組んだら地域の担い手づくりにつながりますと言うと踏み込みすぎではないでしょうか。そのことを意識しすぎると参加者が大変になってしまふこともありますので、担い方を広げていく中で、どういうふうに深入りを促すのかが大事だということではないかと思います。今回の「受け皿」という言葉はそれを意図されての言葉だと思いますので、そうしたストーリーで考えていくことは説明された方がよいかなと思いました。

【事務局】

副委員長がおっしゃっておられた、大人がどうしていいかわからないことをテーマに設定することについて、先日の笠縫東学区のふれあいまつりで授業参観をされていて、こどもたちの発表を聞く形でしたが、掲示物にアオバナを使ったお土産のアイディアというものがありました。商品になったらいけるんじやないかといったものもありました。そういう視点で、出てきた意見に対して大人が受け入れる姿勢でテーマ設定してもいいのかなと思いました。

また、いろんな環境の立場のこどもたちに対して配慮をしてやっていかなければならぬというところで、既に各学区で各団体などとつながりがある地域もありますが、まだまだつながりがない地域の方々に対しても、そのつなぎ役を行政で、教育委員会やこども部局や福祉部局が連携しながら間に入ってやっていけないかと思います。

【I 委員】

伴走支援のことはC委員も言ってくださって、私もまったく同じだなと思いました。小学校に勤めている者としては、資料1を見ていると老上学区は本当に素晴らしい、力を入れた取り組みをされたのでこどももすごくやりがいも満足感もあっただろうし、またやりたいという意見もたくさんある中で、他に広げていこうと思うと、それを支える大人がどうしていくかという点で、まちづくりセンターも継続的に関わってもらう受け皿を用意できていないとか、人材の発掘の難しさも当然あると思います。そこがやはり課題になってくるので、こどもたちからすると、学級の中で、学年で、学校全体で活躍して、今度は外に出て地域で活躍するという素晴らしい取り組みが、一部の子ではありますが広がっていき、その姿を見て自分もしたいなと思う子も出てくると思うので、学校で協力できるところはしていくので、そういう形を地域でも作っていただけるととても嬉しいなとすごく思いました。いろいろとサポートや支援など、そのあたりはこれから課題になるなど、私も皆さんと同じように感じたところです。

【委員長】

特にこの報告書の「4 今後の『地域版E S D』の推進に向けて」に関わっていろんな御意見をいただきました。特にこれまでの地域協働合校の取組をやめてとか、新しい取組をするというのではなくて、これまでの地域協働合校の取組に、付け加えるというとまた

負担感を持たれてもいけないということで、活動の中の一つとして地域版E S Dを推進していくと。ただ、これも全く新しいものというよりは、既存の地域協働合校の事業の継続性に結局寄与する取り組みだということで、地域協働合校の取組は今後も継続していくためにこの地域版E S Dを推進していくところで、そのあたりは負担感を持たれないような書きぶりをしないといけないという点が大きな話だったかと思いますが、細かいところでいくつか重要な視点をいただき、基本は枠組み通りで、いただいた御意見をもとに完成させていくということで了解いただいたかと思いますので、議事3報告書のまとめについても、大枠は了承いただいたということにさせていただければと思います。

本日の議題はこれで全て終了いたしましたのであとは事務局の方で進行をお願いいたします。

閉会

【事務局】

閉会挨拶